

外ノ浦



きたまえぶね とのうら
北前船と外ノ浦

石見国と呼ばれた島根県西部のほぼ中央に位置する浜田は、中世から港町として栄え、1619年（元和5年）には5万4千石の浜田藩が成立し、城下町として発展しました。

この城下町を経済的に支えたのが外ノ浦、瀬戸ヶ島、長浜の港で、特に外ノ浦は、城下町に接する風待ち港として、西廻り航路が整備された後の1700年代前半には、多くの北前船が寄港する浜田藩最大の港として賑わいました。

外ノ浦への北前船の入港数は、北陸、兵庫、山口の船が多く、西廻り航路の中でも、北陸と山口との中継点として重要な役割を担いました。

また、江戸時代の港を格付けした『國々湊くらべ』という番付表では、前頭八枚目に「石見濱田」があげられ、全国的にも重要な港として知られていました。



水ヶ浦



水ヶ谷



津和野藩蔵屋敷(田野尻)

海岸絵図に見る外ノ浦

外ノ浦は、全長約1km、最大幅約200mの細長い入江で、古くから「うはかふところ (姥ヶ懐^{うばがふところ})」と呼ばれる天然の良港として知られていました。

この入江の北側に水ヶ浦、南側に水ヶ谷という小さな平坦地があり、1825年(文政8年)には21軒の廻船問屋^{かいせんどんや}が建ち並び、水や食料などの補給や商品の売買が行われました。

また、船乗りの信仰を集めた金刀比羅神社^{ことひらじんじや}には、1759年(宝暦9年)奉納の鳥居^{せとうちさんかこうがんせい}(瀬戸内産花崗岩製)があるほか、1834年(天保5年)には、船頭たちが風や潮の流れを確認するための日和山^{ひよりやま}方角石も設置されました。

1805年(文化2年)に描かれた海岸絵図を見ると、現在の外ノ浦が江戸時代



海から望む廻船問屋

からの北前船寄港地の面影を色濃く残していることがわかります。



江戸時代の外ノ浦 (1805年 自唐鐘浦至長浜浦海岸絵図の一部)

外ノ浦で取引されたブランド品

北前船は、江戸時代中ごろから明治時代にかけて、北海道から大坂までの港に寄港しながら、安く商品を購入し、別の港で高く売る方法で商売を行っていました。

外ノ浦には、廻船問屋で作成された『諸国御客船帳』があり、約8千～9千隻の船の名前や持主、船頭の名前などのほか、売買された商品についても記録されています。

その客船帳によれば、外ノ浦で売られた商品は、麻を加工した繊維（扱苧）やイワシを干して加工した肥料（干鰯）が多いほか、浜田の山間部で生産された鉄や石州半紙をはじめ、石見焼、石州瓦、長浜人形などもブランド品として売られました。

一方、外ノ浦で買われた商品としては、北海道や北陸方面から大坂へ向かう船からは、米が一番多く、昆布や大豆などの豆類なども買われました。逆に北海道や北陸に向かう船からは、塩、砂糖、酒などを多く買っています。



北前船 (CG制作:株式会社エス)



諸国御客船帳



鉄(銑鉄)



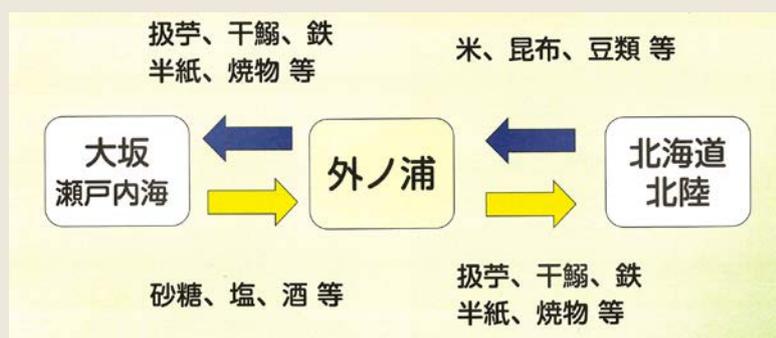
扱苧(こぎお)



干鰯(ほしか)



焼物(石見焼)



外ノ浦を中心とした商品流通

(楯ヶ瀬家諸国御客船帳により阿部志朗氏作成)



石州半紙 (ユネスコ無形文化遺産)



北前船寄港地 外ノ浦の案内マップ

日本遺産：荒波を越えた男たちの夢が紡いだ
異空間～北前船寄港地・船主集落～

認定日：2018年(平成30年)5月24日

浜田市浜田城資料館

〒697-0027 島根県浜田市殿町83番地246

TEL/FAX 0855-28-7151

